

THE YMCA

日本YMCA基本原則

私たちは日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生涯をとおして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2017年5月1日発行 (毎月1日発行)
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円 (外税) (送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: <http://www.ymcajapan.org/>
発行人/神崎 清一 編集人/山根 一般
印刷/あかつき印刷株式会社

子どもの今を共に生きる ～キリスト教保育とは～



神戸YMCA 前YMCA保育園園長
認定こども園松蔭おかもと保育園園長
山ノ井 景子

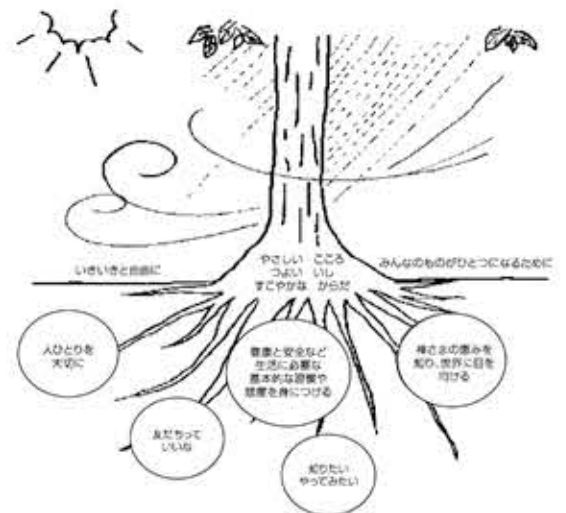
「キリスト教保育とは？」

保育の現場に関わるようになって以来、私は自身に問い続け、共に働く保育者と語り合ってきました。問い続け語り合う中で、キリスト教保育について「保護者に伝えたい」「保育者相互の共有できる何かがある」という願いを強く持つようになり、神戸YMCAの幼稚園・こども園では“根っこを描いた木の絵”を用いて、自分たちが大切にしたいキリスト教保育を保護者や新任保育者に伝えるようになりました。

—人間形成の根っこが育つ乳幼児期として、神さま、そして保護者や保育者の見守りという温かくて愛情豊かな栄養が含まれた家庭や地域という土の中で、子どもたちは自分の力で根っこを伸ばしていきます。早く伸ばそうと引っ張ってみても、水や栄養を与えずとも根っこは伸びません。五感を働かせて、「おもしろそう」「やってみよう」など生活や遊びのなかで感じる好奇心や探究心は子どもの心とからだを動かし根っこが伸びていきます。豊かな心やからだを育むには、友だちの存在が欠かせません。仲間と太くて長い根っこをたくさん伸ばした木は、少々の雨や風などに負けない自律(自立)した太い木となり、一人ひとり違う花を咲かせ、その子らしい実を实らせるでしょう。根っこの成長は見えませんが、子ども自身が自分を信じ、自分らしい歩みをはじめることができるように見守り応援していきます。—

このような言葉を“根っこを描いた木の絵”に添えて、繰り返し職員研修やクラス懇談会で話し、語り合うことによって、どのような環境や経験をする子どもが根っこを伸ばすのか、今、どんな根っこが伸び始めているのかなどを、主体者として自分の根っこを伸ばしている子どもたちのエピソードを添えながら伝え続けています。

それぞれ顔が違うように、子どもたちに与えられている賜物も違うことの豊かさを思います。一人ひとりの存在が尊ばれ、愛され、大切に保育されなければならないということは、保育の原点。子どもを取り巻く時代や状況が変わっても、私たちは、一人ひとりの成長を共に喜び、神さまから与えられた“いのち”を大切に守り育てていきたいと思っています。



根っこを描いた木の絵

REPORT

相手と向き合って心を合わせていくこと。(仏教:親和・共感的関係の築)

「わたし」と「イエスさま」と「道」と

田原バプテスト教会牧師・光の園幼稚園園長
田中 伊策

幼稚園の子どもたちとの礼拝で、「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネによる福音書14章6節)という御言葉からお話をしたことがありました。「イエスさまはわたしは道です」と言われています」と話すと、一人の子が言葉を返してくれました。

「じゃあ、イエスさま踏まれちゃうだね」子どもたちと礼拝をしていると、お話の途中でも思ったことや、分からないことを話し掛けられることがよくありますが、この言葉は、私の心にズーンと響きました。特に響いたのが、「(踏まれ)ちゃうだね」。踏まれる痛みを感じているその子の思いが伝わってきました。

「わたしは道であり……」という御言葉そのものは本来、「わたしは道しるべ」とか「わたしは先立って進む」とかそういう意味であり、文章の脈絡から考えても「踏まれる」ということにはつながりません。でも、この子の言葉には真実があり、私に「どこに立っているのか」を問い掛けるものでした。私は道の上にいると自分を中心に考え

ていましたから、道の痛みに気付かなかったのです。しかし、この子は自分の足元にある道を中心に考え、そこに自分を重ねることができたから、踏まれる存在に気付いたのです。それは、私たちに思いを重ね、私たちの罪を自らに重ねたイエスさまの十字架の姿そのものです。

「じゃあ、イエスさま踏まれちゃうだね」本当だなぁと心から思い、以来この聖句に続く「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」という御言葉は、イエスさまが「わたしを踏んで行きなさい。そのために十字架があるのです」と言っておられるようにしか聞こえなくなりました。

幼子には「脈絡から」とか「厳密には」とか、そういう手続きを経なくても本質にたどり着く感性があります。「道」と「イエスさま」と「わたし」をスッと重ねることができるよう、そんな感性や自由さが、大切にされ守られる社会であってほしいと願い、祈ります。

紹介

YMCAスタディシリーズ 講演記録集⑥
「わたしの生きづらさは何処にある？
かれらの生きづらさは何処にある？」

土井 義隆 学生YMCA夏期セミナー講演

学生YMCAが毎年開催している全国学生YMCA夏期セミナーでは、学生たちの問題意識や関心の中から社会問題を学び、私たち自身の生き方について考えています。昨年は「Stand by Me/You～生きづらさ向き合う～」のテーマの下、若者が抱える生きづらさの内実とその社会的背景について取り上げました。

講師には、社会病理学や青少年犯罪が専門の土井義隆氏(社会学者、筑波大学教授)をお招きしました。豊富なデータと分析を通して、家族や地域において既存の関係性が薄まり、居場所の基盤が揺らぐ現代社会で、その代替としてのインターネットやSNS (Twitter, LINE, Facebookのようなソーシャルネットワークサービス)による開ざされた人間関係が構築され、さらにはその関係性の中で、同質化・細分化が進み、お互いの空気を読み合う若者の息苦しさや浮き彫りにされました。若者の生きづらさを人間関係の視点から考察した2つの講演を、YMCAスタディシリーズ第6弾としてまとめました。講演を、YMCAで若者に関わる方、若者の「今」に関心のある方必読の1冊です。今、私たちに何が出来るのか、共に学び考えるきっかけとなるよう、多くの方が手に取ってくだされば幸いです。お求めお問合せは、日本YMCA同盟まで(1冊500円税込)。



おばあちゃんたちから「平和」を受け継ぐ

原爆養護老人ホームを訪問

広島YMCA保育園
園長 家守 治司

私たちの保育園で、子どもたちに願っていることの一つに「みんながそろう平和な世の中を創り出す人間に、そして平和を築くことに最高の価値をおく人間になってほしい」とあります。その願いを年長の子どもたちに体験してもらおうと、「原爆養護老人ホームむつみ園」への年3回の訪問です。

最初に訪問するのは「花の日」。世界のキリスト教会で、子どもたちが花を持ち寄りて礼拝し、その花を持って病院や施設、日頃お世話になっている方々を訪問する日を、私たちも大切にしています。4月に年長になると、子どもたちは花の種を植え、毎日水やりなどの世話をし、花が咲き始める6月にむつみ園を訪れます。

2回目の訪問となる10月は、語り部のおばあちゃんから原爆の体験を聴きます。10歳くらいだったころに、家が崩壊し家族も亡くなったこと、多くの人の皮膚がた



初めの訪問。手遊びをしながら、すっかり仲良しに！

だれ、水を求めている姿を目の当たりにしたこと……。『どうして飲んだらいい川の水を飲みに行ったの?』と問い掛けたりしながら、『戦争は良くないよね』というおばあちゃんの言葉に子どもたちは強くうなずきます。

秋の「収穫感謝祭」には、自分たちで拾った葉を持って訪問。交流を重ねる中で仲良くなった、大好きなおばあちゃんたちの笑顔を見ることは、子どもたちにとっても最高の喜びとなっています。

保育園から平和記念公園を通り、「むつみ園」へと続く道は片道3.5キロメートルほど。その往復の道のりを、おばあちゃんたちに会いたくて、そして会えたらうれしさに弾みながら歩く子どもたち。その歩みは、おばあちゃんたちから受け継いだ「平和」を創り出す道への一歩でもあると思うのです。



語り部の方から原爆の体験を聞く、子どもたちの背中

自然がいっぱい

園庭を流れる川と「温泉」

幼保連携型認定こども園
富山YMCA救済保育園
副園長 網谷 美智代

開園以来、私たちは「きょうをたのしく、友だちいっぱい、自然がいっぱい、またあそぼう」をモットーに、自然環境の中で自由に遊ぶ子どもの姿を思い描きながら保育を行っています。

園庭には川が流れています。0歳児の小さなお友達から大人まで、みんなが1年中楽しめる「せせらぎ」です。はだして歩く感覚を楽しんだり、魚釣りごっこに夢中になったり、噴水に「おまじない」をかけて水の勢いの違いを面白がったり……それぞれの発達、興味関心に合わせて、子どもたちの遊びは進化していきます。

「わあー! あったかいね」「きもちいいね」「ほくもませて…」

2歳児が特に好きなのは「温泉ごっこ」。ホースを使って井戸水をシャワーのように木の枝にかけていると、子どもたちの足元



園庭に流れる川「せせらぎ」で遊ぶ

に「温泉(水たまり)」が……! 雨上がりには天然の「温泉」ができることもあります。築山近くは砂ではなく粘土質の土なので、地面は水を吸ってドロドロのヌルヌルになります。

近年、室内でテレビゲームやDVD、商品化された玩具での遊びに満足する子どもが目立ってきていますが、多様な自然の中に、決まりきったルールはありません。友達と一緒に土や水の感触を楽しみ、草木や花、虫や小鳥など身近な動植物に触れて、命の大切さを知る自然の中で、子どもたちは同時に、自ら考え学ぶ力、「危険」を回避する知恵と能力も身に付けていきます。

私たち大人も、今、目の前にいる子どもたちと共に「きょうをたのしく」過ごしています。子どもたち一人一人に20年、30年後の成長した木々の姿を重ねつつ、健やかに育てていく大切さを実感する毎日です。



2歳児が大好きな「温泉」!

自分の「いのち」を自分で守る

着衣泳に挑戦!

認定こども園
仙台YMCA幼稚園
園長 高橋 祐子

仙台YMCA幼稚園では、年間を通して毎週1回、保育の中で水泳を行っています。入園当初は水着を見るだけで泣いている子ども、だんだんプールの時間が大好きになり、「水は楽しい、気持ちがいい」と毎回喜んでプールに入るようになっていきます。

そんな子どもたちが家族と一緒に海や川、沼などに泳げる機会が増える夏休み前に、20年以上、毎年必ず行っているのが「着衣泳」です。普段、水着で水に入っている子どもたちが、その上に洋服を着て潜ったり、泳いだりすることで「思い通りに体が動かない」「洋服がぬれると重くなる」という「普段通りにはいかない」ことを体験します。そしてその後、洋服



水着の上に着衣泳をする「初めの体験」

に空気を入れて浮く方法などを学びます。

また、子どもたちに「濡れた人を見た時に自分たちはどうするといいか」ということを覚えてもらうために、水泳担当のスタッフがプールの中で濡れている人や助けを演じる劇を見せます。ここでは「子どもはまだ力がないので、自分で助けるのではなく、近くの大人を呼ぶ」ことを学びます。

「水の楽しさ」を子どもたちに伝えている私たちは、同時に「水の怖さ」も伝える責任があります。子どもたちには「言葉」で伝えるだけでなく、実際に「体験」することを通して、自分の「いのち」を守る力を身に付けてほしい。それが私たちYMCAの願いです。



水の中で、洋服の重さを感じる時間

子どもの「いのち」が咲く時
YMCAのチャイルドケア

この世界に生まれた「いのち」は、すべて、どんな「いのち」もかけがえのないもの。それなのに、子どもたちは成長する過程で、いじめや差別、貧困や競争などさまざまな現実につづり、傷つき、自分が自分であることを肯定できなくなってしまうことがあります。しかし、幼いころに丸ごと受け入れられ、愛された経験があれば、「自分自身」も、隣の人も、草木や虫も、いろいろな「すべての「いのち」」を愛する心が育ち、たとえ自信をなくして悩むことがあっても、乗り越えていく力が生まれるのではないのでしょうか。全国YMCAの100を超えるチャイルドケアの現場で、ありのままを受け入れられ、さまざまな出会いや発見の中で「いのち」の花を咲かせている、子どもたちの日常を紹介します。

自分もいい! 友達もいい!

「クレイジーヘアディ」

東京YMCA国際キッズガーデン
主任 村上 千鶴子

さまざまな国や地域の背景を持つ子どもたちが通う国際キッズガーデン(英語幼稚園)にはいろいろなイベントがありますが、中でもユニークなのが、6月の「クレイジーヘアディ」です。その名の通り、当日はクレイジー(ユニーク)な髪型で登場します。頭の上に花が咲き乱れていたり、鏡をクリムに見立てたケーキや電車が頭の上に乗っていたり、三つ編みに浮かぶ風船をくり付けたり、何でもアリです。



個性的な髪型は「いちご」!

中には髪型に合わせたドレスやコスチュームを身につけて、一足早いハロウィンのような子どもたちも……! もちろん子どもたち

けでなく、先生やスタッフもクレイジーヘアで出迎えます。

この日のメインイベントはファッションショーならぬクレイジーヘアショー。全クラスがホールに集まり、1人ずつステージに立ちます。その前にはマットをつなげたランウェイ……かわいいモデルたちがそこを歩いて思い思いのポーズを取ります。意外に普段おとなしめな子がしつかりとポーズを決めることも。子どもたちはお互いに興味津々、笑顔と歓声の中、目を輝かせて楽しみます。お母さんやお父さんに見ていただくので、うれしさもいっぱいです。この日に向けてきつと家では「どんな髪型にする?」「お花が好きだから付けたい」「じゃあお店に探して行ってみたいかな?」など、親子でお話をする時間を持つこともあるでしょう。

私たち教師の願いは、日頃は元よりこうしたイベントを通して、子どもたちが国や言葉、文化、そして一人一人の個性の違いを楽しみ感じて認め合ってもらい、ユニークな自分を表現して、自信を持つことを学んでほしいということ。ですが実際は、私たちの方が、多様性を自然に受け入れている子どもたちから教えられる、学ぶことが多いのです。



ハルーンヘアも、赤いアフロもよく似合う!

家族に感謝、家族と感謝

「ありがとうのひ」

名古屋YMCA南山幼稚園
園長 東田 美保

春、一つ大きくなって、子どもたちはうれし顔やドキドキ不安な顔で幼稚園にやってきます。そんな中、子どもたちは日々いろいろなことを感じたり、新しい発見をしたりしながら、お友達や先生と過ごす時間が、だんだんと楽しくなっていきます。

私たちの幼稚園では、毎年、子どもたちも保護者の方も園生活に少しずつ慣れてきた6月初めに、「ありがとうのひ」という行事を行います。この日は、私たちが神様から大切な人たちを与えられていて、お互いがかけがえのない存在であることを喜び、「ありがとう」の気持ちを伝える日です。

当日、子どもたちはお家の方と一緒に登場し、子どもたちは各部屋で、お家の方はホールで礼拝を持ちます。大人の礼拝では島津子先生(名古屋堀川伝道所牧師)が、子どもを愛する親自身もまた



「ありがとうのひ」

愛される存在であり、神様に愛されているのだということを温かく伝えてくださいます。

各クラスで過ごした後は、「コーナーの時間」が始まります。おやつコーナー、小物づくりコーナー、そして園庭に大きなブルーシートを敷いて行う「木工コーナー」。

木工コーナーには、製材されたさまざまな形の木片や板、のこぎりや金づちが並びます。小さな子は、初めてののこぎりにチャレンジ。お兄ちゃんやお姉ちゃんも手伝いに駆け付けると、家族で力を合わせて、世界に一つだけの椅子や、ぬいぐるみのベッドを作ります。

子どもも大人も、大切な人と過ごす「ありがとうのひ」一緒にいられることに感謝、愛されていることに感謝……。この特別な日に、大切な人へ「ありがとう」の気持ちを伝えることが、子どもたちの「いつも」「たくさんのごちそう」「いろいろな人に」感謝する心を育てていくことに願っています。



家族と一緒に、家族のために作る「木工コーナー」

NEWS
各地の動きをご紹介します。

●「第22回学生YMCAインドスタディキャンプ」
報告 — 学生YMCA

2017年2月22日～3月11日の約3週間、全国から学生YMCAの大学生キャンパー4人と団長、引率スタッフが南インド各地を訪れました。現地では、貧困ゆえに家族と暮らすことができない子どもたちの施設に滞在し、子どもたちとの触れ合いや草の根で活動する人や団体の働きに触れ、出会いと学びを体験しました。



大好きな子どもたちと（中央が団長さん）

帰国した今の率直な感想は「すごかった!」の一言です。いつもの私なら「楽しかった!」と答えるかもしれませんが、楽しい思い出と共に、インドでの慣れない生活や食事への戸惑いや、疲れや風邪で体調を崩し、思うように自分がしたいことができない悔しさも経験したからだだと思います。

一番印象に残っているのは、子どもたちの笑顔や肌が触れた時の触感、そして私を呼ぶ声です。クリケットに熱中する子どもたちを見学していると、遠くから「あやか!あやかー!」と何度も呼んでくれたことが、うれしくてうれしくて一生忘れられそうにありません。ぴったりと私にくっついてお話をしてくれた子、メモ帳を取り合いながら英語やタミル語で自分の名前を必死に書いてくれた子どもたち、すべてが魅力的で輝いて見えました。

インドに行く前からずっと、子どもを笑顔にしたい、何かをしてあげたいと思いながら、何を、どうやってしてあげたらいいのか分からずにいました。けれど、一緒に過ごすうちに、やっぱり子どもたちに関わって生きていきたい、世界中の親と暮らせない子どもたちを支援できる仕事がしたいと決心がつかしました。セントポニファスにいる子どもたちに会いたい、遊びたい、もっと友達になりたいという一心で、今すぐにでも子どもたちのところへ飛んで行けそうです。

私がインドスタディキャンプに参加できたのは、YMCAや東京北ワイスメンズクラブの方々、現地を出迎えてくれたスレッシュさん、一緒に旅した団長とスタッフとキャンパー、そして家族の支えのおかげだと本当に感謝しています。そして、あの子どもたちやキャンプで出会った人たちが、健やかに笑顔でこれからの人生を歩めるように心から願っています。いつかまたどこかで会いましょう。 清泉女子大学YMCA2年 越智 文香

●「国際ユースボランティア」による
熊本地震支援活動報告 — 熊本YMCA

熊本YMCA国際ユースボランティア（以下、国際ユース）は、県内の大学生約30人で構成されており、国際交流・協力を目的とした活動を主体的に企画、実施するグループです。

2016年4月、国際ユースが新年度の活動を始めた矢先に熊本地震が発生しました。YMCAが発災翌日から救援活動を開始したことを知ると、メンバーから「私たちにできることはありませんか」という問い合わせが入り始めました。

そのころ、阿蘇YMCA（宿泊研修施設）では、ゴールデンウィークに多くのボランティアが来られることを想定し、ボランティアセンターの立ち上げを計画していましたが、スタッフも被災するなどして準備が進まない事態となっていました。

そこに手を挙げたのが国際ユースでした。泊まり込みで立ち上げ準備を行い、一定のめどが立つと、瓦礫撤去などの先遣隊として被災地域に赴きました。その後メンバーたちは3～5日間でローテーションを組み、5月末まで一日も途切れることなく、阿蘇地域の災害復興支援に当たりました。



阿蘇市内で瓦礫を撤去する国際ユースのメンバー

国際ユース会長の増本久美子さん（当時、熊本大学2年生）のもと、「今年度の活動は復興支援活動」「月2回、必ず阿蘇で活動を行う」というテーマと方針が決まり、留学生も加わった支援活動が継続されました。地震発生直後から11カ月間、ひと月も休むことなく行われ、今年の2月まで活動しました。

メンバーが毎回活動記録を作成したこと、夏を迎えるころには職員と相談しながら、彼ら自身で活動内容を変えていったこと、また、交通費や宿泊費はバザーなどで捻出するという彼らのチャレンジも注目に値します。

一連の復興支援活動に関わった国際ユースメンバーは延べ300人以上に上ります。8～9月期には多くの大学生が阿蘇YMCAをベースキャンプに復興支援活動に加わりましたが、そのレールを敷いたのは国際ユースのメンバーでした。

YMCAの取り組むユースディベロップメント（青少年の育成）。その一つの形が、熊本地震という大規模災害直後の混乱期にユース自らの意志によって現出したという事実を、災害復興支援の記録に刻みたいと思います。 熊本YMCA 富森 靖博

●「3.11東日本大震災被災者追悼礼拝」報告
— 仙台YMCA

仙台YMCAでは、東日本大震災から満6年となった2017年3月11日に、「3.11東日本大震災被災者追悼礼拝」を行いました。



メッセージを語る川上直哉牧師

日本YMCA同盟が作成した「東日本大震災 YMCAの取り組み」のムービーを見た後、礼拝では日本基督教団仙台北三番丁教会担任教師、NPO法人東北ヘルプ（仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク）事務局長の川上直哉牧師から、「被災地の日常に寄せる箴言」という題でメッセージをいただきました。

川上牧師は震災後、福島第一原発の影響で避難を余儀なくされている被災者の支援活動を積極的にされています。語られたメッセージは、震災から6年が経過した今、各地で見られる復興に向けた変化……といったプラスの話が中心ではありませんでした。被災者の方々が見せる笑顔や元気な姿は、「実は空元気なのです」という内容でした。私たち支援をしている側は、町が変化し、人びとの笑顔や元気な姿が戻ってきたことを「復興」の象徴だと思っていました。しかし、福島も含め被災された方々は、町が復興に向かう中、笑顔や元気な姿を頑張って見せようとしていた、無理をして作っていたのだということに気付かされました。

あの震災で受けた苦しみ、簡単に癒えることはありません。皆さんが受けた苦しみ心が心の中で消化され、心の底から笑い元気な姿になるという、本当の意味での「復興」にはまだまだ時間がかかるであろうことを実感しました。

川上牧師からのメッセージに続き、日本YMCA同盟の山根一般主任主事からは、東日本大震災と熊本地震の支援活動についてお話をいただきました。また、参加された方々からの献金は、すべて東北ヘルプの活動を支えるためにお渡ししました。

発生から7年目となる東日本大震災にも、また1年がたとうとしている熊本地震にも、人びとの関心は薄れていくように感じます。しかし、私たちYMCAは、被災された方々に寄り添い、本当の苦しみを知り、発信を継続していく使命があると、あらためて感じています。 仙台YMCA東日本大震災支援対策室 黒田 敦

●「入学おめでとう応援隊2017」
ボランティア報告 — 横浜YMCA

「入学おめでとう応援隊」は、朝鮮学校の入学式を訪れ、子どもたちの入学を笑顔と拍手でお祝いする活動です。日本人の拉致被害などが明らかになったころ、朝鮮学校や子どもたちへの嫌がらせが相次ぎ、心を痛めた神奈川県内のNPO/NGO関係者や教員が中心となって2003年に始まりました。横浜YMCAもボランティアとして協力、子どもたちが笑顔で学校生活の第一歩を踏み出し、安心して学校に通っていけるようにという願いを共にしています。



会場を彩った「おめでとう」の飾り

15回目を迎えた今年は、4月2日に神奈川県内3校と東京都内1校で、「入学おめでとう」とハングル、日本語で書かれたオレンジ色ののぼりを掲げました。私が参加したのは、川崎朝鮮初級学校の応援隊。まず、会場となった体育館の前で子どもたちと保護者をお迎えし、次に、会場に入ってお祝いをしました。

今年の新入生は小学1年生が6人、幼稚園に入園する子どもが3人でした。家族や先生方に見守られながら、在校生の作るアーチをくぐって笑顔で入場する新入生たち。式典では、校長先生からご家族に向けて、この学校を選んでくれたことへの感謝が述べられ、また「応援隊」の私たちもご紹介いただきました。

在校生代表の6年生からは「お友達をたくさんつくって、楽しく学びましょう。私たちは見守っていますよ。仲良くしましょうね」という言葉が贈られ、新入生代表は「お兄さん、お姉さんと遊んで、楽しく学校に通います。勉強も頑張ります」と元気に答えました。

式典の後、応援隊9人で持った振り返りの会では、「校長先生のごあいさつに、地域のみんなで子どもたちを育てていきましょう、という思いを感じた」「子どもたちの明るい様子、式典の温かさが良かった」「初めて来た私にも、ありがとうございます」と、保護者の方々が声を掛けてくださりうれしかったなどの感想が交わされました。

私たちの願いは「入学おめでとう隊」がなくなるような世の中にあることです。「おめでとう隊」としてではなく、同じコミュニティに生きる仲間としてお祝いに来ることができるような社会を、私たちはこれからも目指したいと思います。



日本YMCA同盟 真鍋 泉 川崎朝鮮初級学校での応援隊